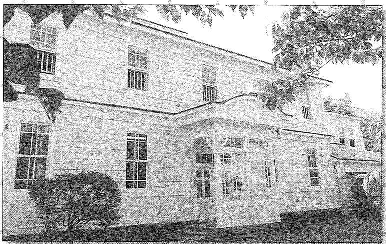
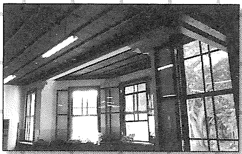
遺愛幼稚園　北海道函館市

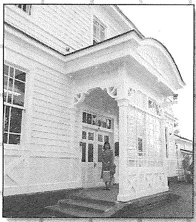
シリーズ 子どもが育つ場所を訪ねて

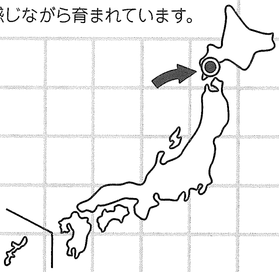


日本全国にある「子どもが育つ場所」を幼稚園教員が訪問。自分の目で見て聞いて感じたことをレポートします。

第5回は函館、遺愛幼稚園。伝統ある園、ぬくもりある木造園舎で、子どもたちは伸びやかに暮らし、命の大事さ、信じる心を感じながら育まれています。



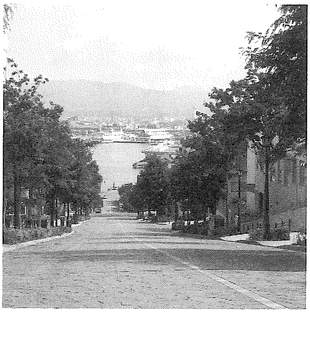




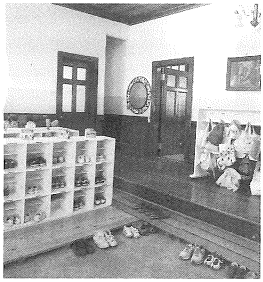
函館駅に近い宿泊先から歩いて幼稚園に向かう。その道の途中には日本最古のコンクリート電柱、そのまま二十間坂を上ると「東本願寺函館別院」の堂々たる姿が目に飛び込んでくる。この建物は日本最初の鉄筋コンクリート寺院だという。異文化をいち早く取り込んだ歴史を今も目の当たりにすることができる町並み「伝統的建造物群保存地区」に位置する遺愛幼稚園を訪れた。

◆異国情緒漂う町並みの中にある幼稚園

「幼稚園はもう近いはず」と次の坂を曲がると、八幡坂から見下ろす函館湾の景色が目の前に広がった。CMか映画で誰もが目にしたことのある八幡坂を上り切り、左へ曲がるとすぐに幼稚園。やさしいピンク色の木造園舎は異国情緒漂う町並みにしっくりとなじんでいる。建物の壁にはこの



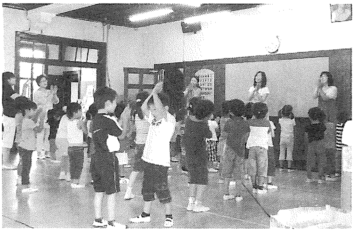
辺りでよく見かける「伝統的建造物」のプレートがはめ込まれており、園舎そのものが保存地区の大切な建物の一つになっていることが訪れた人に伝わる。「ここが現在も使われている幼稚園？」と素敵な園舎のたたずまいにしばし見とれてしまう。アプローチの階段を数段上り、インターホンを押す。返事とともに扉が開き、かわいい声が「どうぞ」と招き入れてくれた。玄関に入ると旧家のお宅にお邪魔しているようで、子どもたちも幼稚園という家を訪れるような気持ちで通園しているのだろうと想像された。



◆本物に囲まれた暮らしを

木造二階建ての園舎内に足を踏み入れると濃い茶色の木の天井、柱がとても落ち着いた雰囲気を醸し出している。園舎一階は保育スペースで中央に遊戯室（以下「ホール」）があり、その両側に小さめの保育室が二部屋ずつあり、四、五歳児がそれぞれ二つの保育室を使っていた。

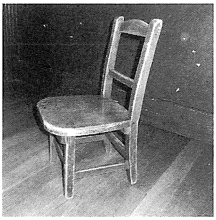
ホールではちょうど朝の集会をするところだった。ふと見ると、隅の方に座っている子がいた。大丈夫かしらと思って見ていると、そっと近づいてきた友達と話をして、晴れやかな顔で集会の列に加わっていった。先生が大きな声で子どもを集めることもなく、自然に会が始まっていく。厳かささえ感じる空間の中で、子どもたちが活動する姿はあくまでも自然で、伸びやかに体を動かし、笑い声や大きな声も上がっていた。



北海道の二学期は始まりが早く、九月には運動会があるという。この日の集まりではみんなで体操、そして副園長先生のお話を聞いたあと、中央のホールでは三歳児がかけっこの練習を始めた。その隣の保育室では四歳児が担任の話を聞き、歌を歌

い始めた。異学年の活動が隣り合わせで進められ、他学年の活動が自然に目に入りながらそれぞれが自分たちの活動に集中している。オープンスペースの小学校が盛んに作られるよりずっと以前に作られた園舎は、回遊式の空間であり、今も新しさのある斬新な環境構成になっている。

ホールの周囲に置かれたプラスチックのブロックは木箱に収められていて、室内に置かれる遊具の環境が調和的に保たれている。「小さいころになじんだものは大きくなっても忘れません。壁に貼るものも昔からのもの、大人の鑑賞にも堪えられるものだけを飾るようにしています」と吉田真理子副園長先生は語られた。子どもたちが座る椅子からも木が



大切にされていることが伝わってきた。

◆見上げると函館山

園舎の裏側には畑があり、自然農法でイチゴやインゲン、エダマメ等を育て、収穫後は自宅に持ち帰って食したりしているという。園庭は園舎を取り巻き、決して広いとはいえない。幼児期は好奇心旺盛に、いろいろな体験ができるようにしたいと考え、特に自然とかかわる体験を大事にし、山へ出かける機会も多くしているという。

新旧の園舎をつなぐ廊下に手洗い場がある。手洗いをする時、見上げると函館山が視界に入る。二つの園舎が左右のフレームになって、毎日の生活の中で紅葉や雪景色と季節の移ろいを感じられる、とても魅力的な空間になっていた。

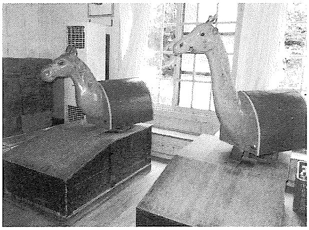
子どもたちはお隣にある「函館ハリストス正教会」の鐘の音でお弁当の時間に気付いてここへ手を洗いに来るという。こうした日々の生活の中で、子どもたちの心と体に情緒の豊かさが確かに蓄えられていくのだろう。

園庭はコンパクトながら、樹木も昔からあるものイチジク、ボケ、梅、桜、ツツジ、ボタン、カエデと多様な種類の木が植えられていた。畑の近く、裏の広場の中央にあるクルミの木は大きく枝を広げ、子どもたちを見守っているように感じられた。

◆歴史を大切にし、今の子どもの生活につなげる

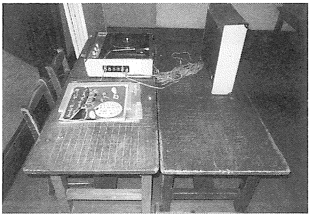
室内運動場は本館建築の翌年、大正三年に建てられた。室内には木製の動物乗り物が二基置かれていた。キリンとウマの乗り物は大人でも乗ってみたくなる懐かしい風情で、元々は下部の台にモーターが内蔵されていたそうだ。今でも子どもたちに人気の遊具であるとのこと。園庭への出入り口には、おもちゃコレクターなら垂涎もののレトロなブリキの乗り物も置かれていた。

室内には高く吊り下げられたブランコや砂場もあり、北国の幼稚園、厳しい寒さの中、園舎の中で体を動かして遊べるような工夫が当時からなされていたことが伝わってきた。



旧園舎の二階は現在、園長室や職員室、和室、倉庫になっている。以前は宣教師の住まいだったという。園長事務室には、軽井沢彫りの素敵な家具があり、倉庫にはたくさんのフレーベルの恩物用の机が収納されていた。隣の小部屋には貴重な研究資料が置かれたフレーベルの机があった。聖学院大学の永井理恵子教授がここで調査を続けているとのこと。遺愛幼稚園の歴史が時間をかけて

ひもとかれた集大成が、近著『近代日本キリスト教主義幼稚園の保育と園舎』[注]として出版された。詳しくはそちらをぜひお読みいただきたい。研究者と実践者の出会い、立場は違おうとも、保育の成り立ちの歴史を大切にし、今につなげて生かしていきたいという熱意がこの場所からもひしひしと伝わってきた。



▲フレーベルの恩物机

吉田副園長先生は「父、私、息子と親子三代の卒園生です。自分がここで育って、役立っているものがあるのです。自分がここで受けてきた教育を、今のお子さんにそのまま伝えていきたいのです」と話された。膨大な歴史的資料の整理にあたっていらしたエネルギーの源はここにもあるのかもしれない。

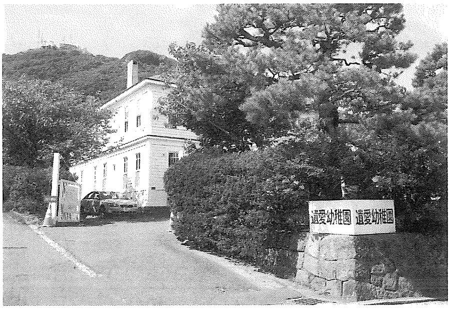
二階の廊下は六センチも床を上げる補修をされたという。「建物が傷んできています。土台の上の木を直せばあと百年もつといわれていますが……」。大切に保ち続けるためのご苦労もうかがわれた。

新築の園舎の三歳児保育室も木を大切にして、旧園舎との調和が保たれていた。二階には一、二歳児の部屋があり、ゆくゆくは総合的に子どもが育つ場所にしたいという。伝統を大切にするだけではなく、今の必要性に応じ、これからを見つめる教育観が伝わってきた。

◆キリスト教と保育

「遺愛幼稚園の保育はキリスト教を基としています。神から与えられた自分の命を大切にして、十分に自己発揮できる人になると同時に、他者と共に心を寄せ合うことのできる人になってほしい。そして目に見えないものを信ずる心を持てるようにと願いつつ、日々子どもたちと共に歩んでいます」と吉田副園長先生のお話を伺った。

皆で感謝する心や人を思いやることを大切にしていることは、この日の保育場面でも「お休みの〇〇ちゃん、早く元気になりますように」と担任の先生が話されている場面から伝わってきた。



昨年、米寿を迎えた卒園生が車椅子に乗って園を訪ねていらしたという。「自分が確かにここに存在していたことを確かめていらっしゃいました。この幼稚園の大切な役目を改めて感じ、身の引き締まる思いがしました」という話に、幼児教育に携わる者なら誰しも、自分が働く園がそんな場所になれたらと願わずにはいられないという思いを強くした。

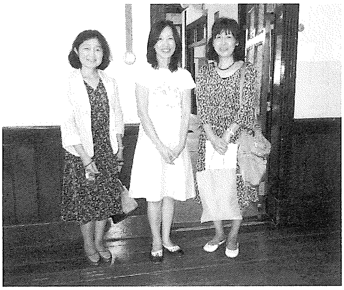
ある時、園舎の外壁を調べたら、十色ものペンキが塗り重ねられていたという。その時々にお化粧直しをしながらこの場所にあり続けた園舎、北海道に初めてできた幼稚園。時を重ねた空間がこれからも永く子どもたちと共にあり続けてほしい。

訪問者／上坂元・吉岡

文／上坂元絵里（お茶の水女子大学附属幼稚園）

注

永井理恵子『近代日本キリスト教主義幼稚園の保育と園舎　遺愛幼稚園における幼児教育の展開』学文社　二〇一一年九月



— 訪問メモ —

訪問時期：2011年8月
訪問場所：学校法人遺愛学院
遺愛幼稚園
〔創立〕1895（明治28）年
〔住所〕北海道函館市元町4－1
〔電話〕0138-22-0419
http://www.iaiyoshi-h.ed.jp/iaikid-m